

屏風崎

七尾港の南湾と西湾の境界、屏風瀬戸（屏風口）。

幅約800m、深さ約9m（最南部）の屏風瀬戸、その両端には珪藻土の岩肌が壁のように海面からほぼ垂直に切り立つ屏風崎（須曾屏風）と石崎屏風（屏風岬）の二つの岬があります。

「屏風」の名は、その形が屏風を立てた姿に似ていることから名付けられました。

屏風瀬戸の両端に分かれている二つの「屏風」は、遠い昔にはつながっていたという伝承が残されています。今では、かつての「屏風」に替わって、能登島大橋が陸をつないでいます。

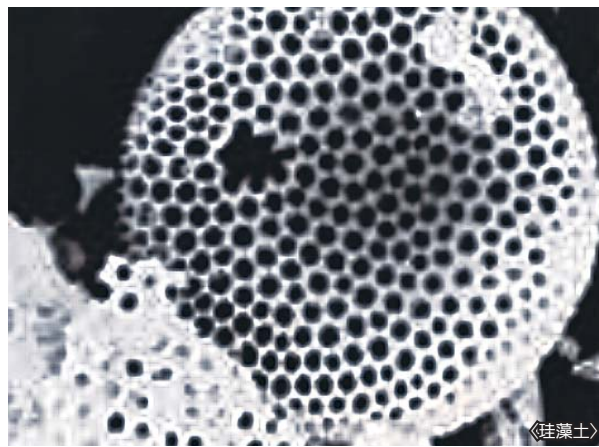
七尾の珪藻土（和倉含珪藻泥岩層）は、1200万年から1000万年前に生息していたケイソウ（10分の1mm〜100分の1mm）という植物プランクトンの死骸が海底に長年にわたって堆積し、化石化してできた泥岩です。

珪藻土は、今では利用価値が高まり、色々な製品に利用されていますが、藩政期から昭和当初にかけては、利用価値が低いものとされて、埋立の際に下地として使われていました。

ケイソウの体は、珪酸（Silica）質というガラスと同じ物質でできた殻で覆われています。この殻には無数のさまざまな大きさの微細な孔が

規則正しく空き、多孔質構造をしています。

この珪酸質でできた超微細・超多孔質という構造により、珪藻土は断熱・防火、脱臭・調湿、遮音、軽量などの優れた性質を持った天然素材です。



〈珪藻土〉

珪藻土のこれらの性質を利用して、コンロ（七輪）、耐火煉瓦の原料や飲料水などのろ過材、吸着・脱臭剤、建築材料などとして幅広く利用され、珪藻土工業は七尾の産業のひとつとなっています。

両屏風は、石川県鹿島郡誌に「名跡」屏風崎として、その断崖絶壁の姿、崖上に繁る松の姿を七尾湾中の「奇勝」「絶景」であると書かれてあり、屏風崎を詠んだ

今宵逢ふ星のもうけや屏風崎

梅 通

屏風崎まはるや舟に風薫る

受 來

みしか夜に疊残りし屏風崎

梅 室

という俳句が紹介されています。

石崎屏風は、かつて清水間といわれる入り江によって引き潮の時だけ地続きになっていたと聞きました。

その頃の石崎屏風には、鹿が棲んでいて、石崎の若い衆が宴をひらくときは、丸木舟で石崎屏風に渡り、みんなで鹿を崖へと追い詰め、海へ落として捕まえて食べるということがあったそうです。

屏風崎・石崎屏風は七尾湾に突出した断崖絶壁という目立つ形状から古くから漁場や船の運行の目印とされています。

しかし、屏風崎の海に突き出た珪藻土の岩は、船での運搬がしやすいという理由で、宅地や田畑を造成する埋立の下地として削られていました。

昭和8年から9年にかけての万行町の造成（万行浜）の際に、屏風崎の岩肌が発破をかけ、大量に削り落とされた結果、屏風崎の形が今のようになったそうです。